

吉田 裕著

『バタイユの迷宮』

書肆山田 二〇〇七年

古 永 真 一

バタイユの著作に親しんだことのある人ならば誰しも痛感するのは、バタイユの世界はまさに《迷宮》だということである。迷宮とは出口が容易にはわからないように作られた建物であるが、バタイユのテキストも主題や形式が多岐に渡り、哲学的言説と宗教的パトスに関わる表現とボルノグラフィックな描写が入り乱れ、何度読んでも《出口》は簡単には見つからない。バタイユの迷宮はミステリー作家が構築したような迷宮とは異なるとすれば、この場合の《出口》とは何を指しているのだろうか。そもそも《出口》はあるのだろうか。そんな問いを発しながらもつい足を踏み入れてしまうような魅力がバ

タイユにはある。

本書は二部構成からなり、第一部ではバタイユの小説『眼球譚』、『死者』とバタイユの名著『内的体験』について、第二部では「恍惚」^{エクスタシー}へと収斂する供儀の儀礼や非生産的消尽を重視する経済^{エコノミー}の解釈や秘密結社「アセファル」の活動が考察される。

第一部では、エロティックな文学的テキストを中心に据えたいわば『作家バタイユ』の解説がなされている。本書でも言及されているように『眼球譚』については、すでにロラン・バルトの論考「眼の隠喩」がある。バルトは眼球や卵といったイメージ連関の法則と運動を手際よく分析してみせたが、本書では言語の運動だけで読み切ったバルトの解釈とは別のバタイユ読解、言語の意味作用を別の運動につなげる読解が提唱されている。すなわち、テキストを「共振態」として捉えることで、テキストとそれ以外の世界を共振させるような読み方が模索されている。こうなると、テキストの表層的な運動を解釈する記号論や、リビドーという観点から個人の自己

形成やトラウマを家族関係から解明する精神分析だけでは不十分となり、社会的・歴史的領域まで視野に入れねばならなくなる。結果としてテキストは錯綜し、複雑化する。だが、このような猥雑さに満ちた時空こそ、バタイユのテキストの特性であるとすれば、バタイユを読み込むためには、本書で実践された、多層にわたる複眼的な読解が要請されるのだ。その結果、およそフロイト的なシェーマにおさまらないバタイユの「盲目の父の像」、現代の経済合理主義からすれば理解しかねる「供儀の儀礼」や「破壊を結節点とするエコノミー」といった主題が『眼球譚』から読みとることができる。注意すべきは、だからといって本書が社会学的・人類学的な読解を勧めているのではないということである。本書で展開されるのは、テキストに絡み合う多種多様な運動をそのまま掬い取ろうとする読みであって、専門分野の知識に基づく読読格子によって対象と距離を保って抽象化するような解釈ではない。その意味では、著者の粘り強い思考、そうした思考に裏打ちされた引き締まった文体がま

さにバタイユのテキストに寄り添って共振する運動を体現していると言える（残念ながらこれは書評という《交通整理》的なフォーマットでは紹介しきれない部分である）。

『死者』は、著者曰く「バタイユの全作品の中で、もっとも凝集力が高く、悲劇的で、猥雑な作品」であり、著者のバタイユに対する関心の出発点というだけあって、一段と読み応えがある。『バタイユの迷宮』という書物自体が一つの長大な『死者』論なのだと思ってみてみるほどである。バタイユ研究者の間でも『死者』を高く評価する声は聞くが、『眼球譚』や『内的体験』などと比べると、論文は不思議と少ない。あのように過激な作品を論文という冷徹な形式で叙述するとなると途方に暮れてしまうのだろう。だが本書は、『死者』のスカトロジックで残酷な側面を真正面から見据えるだけでなく、一見すると不可解な物語の展開や一節の読解も試みている。その謎が具体的には何なのかという点については読んでいただくほかないが、『死者』を『内的体験』

や『マダム・エドワルド』といった他の作品と並べてみたとき、星座のごとく解説される布置があるとだけ記しておく。

本書の第二部は、『思想家バタイユ』に関して、主として神学的思考批判としての「供犠」をめぐって考察されている。供犠という生け贄を捧げる血なまぐさい儀式は、バタイユ思想の中心概念であり、彼の強迫観念でもある。バタイユのエロティシズムやサド解釈やヘーゲル批判は、供犠という残酷な宗教儀礼を考慮しなければ捉えることはできない。とはいえ経済的効率性の価値観に奉仕すべく訓育された現代人は、なぜいまさら供犠なのかと訝るかもしれない。だが、バタイユにとって供犠とは野蛮な遺物ではなく、人間を人間たらしめる瞬間を考察するにあたって近代を批判するうえで決定的な要素となるものであった。供犠の歴史や目的については諸説あり、バタイユはラスコーの洞窟壁画の先史時代にまで遡れると考えていた節もある。本書では、バタイユが供犠に関する思考をどのように練り上げていったのかを口

バートソン・スミス、ユベール／モース、フレイザー、フロイトらの供犠論を参照して論じている。ロバートソン・スミスが注目したトーテム動物の殺害は贈与よりは破壊としての供犠として、ユベール／モースやフレイザーが着目した自己毀損としての供犠は最終段階である神の供犠として、フロイトの供犠論は原父殺しによるタブーと共同体発生の原理として概観されている。供犠の変遷と消滅の歴史は、野蛮さが減じて人格が陶冶されていく人間化の歴史として見ることも可能であろう。バタイユはこの歴史観にヘーゲルの閉じられた知の体系を見たのであった。バタイユは、ヘーゲルの知が非知へと開かれる思考を模索するなかで、一般経済学を背景とする供犠がその鍵になるのではないかと思に至る。おそらくその過程でバタイユは以下のような疑問を抱いた。供犠という形で消尽されていた人間に内在する攻撃性は、近代化の過程でいったいどうなってしまったのだろうか。供犠によって垣間見んとした「死」という未知の領域は「神」という言葉によって片づけられてしまった

のだろうか。現代において供犠のもつ宗教的パトスを体験することは不可能なのだろうか。

ヘーゲルは死を恐れることで労働に邁進すること人間の意味や価値を見出し、反論するのも困難な綿密にして精緻な体系を練り上げたが、バタイユはそれに対して「供犠の思考」で反駁を試みる。本書では、ヘーゲルの「死の哲学」に対してバタイユが「笑いの哲学」を対置していった経緯が「内的体験」から「好運」へというキーワードを駆使して考察されている。バタイユ的な意味での「笑い」とは、究極的には死という悲劇を笑うというニーチェ的な「笑い」であって、死がまさに人間を押し潰そうとするときに自己という枠を超えた「宇宙的なエネルギーの流れ」へと自らを開く「笑い」であると本書では述べられている。この「宇宙的なエネルギーの流れ」については『有用性の限界』などの一般経済学で描出されたバタイユ的コスモロジーにその根拠がある。また本書の『眼球譚』論で示唆されていた、テキストとは別の運動に共振させるという見方もこうした世界観を

前提としており、バタイユの文学的テキストの読解とも無縁ではないはずだ。ただバタイユ的な「笑い」について注意しなければならないのは、この「笑い」も何かしら特権的な体験として「意味」づけられてしまえば、笑いの軽やかさを失うことになる以上、「意味」づけられた笑いをさらに笑い飛ばさなければならぬということである。こうした点を踏まえると、本書でいかにしてバタイユの「決定的に無神論的な立場」が開示されるのかは読みどころの一つである。

第二部で注目されるのは、バタイユ思考の核に位置していた供犠の概念が変質してゆく過程、言い換えればバタイユ内部のヘーゲルの思考とニーチェ的思考が混濁し、変質し、生成してゆく様子が丹念に辿られていることである。このことを本書では、内的体験（ヘーゲルの）から好運（ヘーゲル的ではないもの）へ、脱我状態と法悦を得る方法の重心が「供犠」から「瞑想」へと移ったと述べられている。動物から人間への移行をヘーゲルⅡコジェーヴ的な視点から晩年までこだわったバタイ

ユが、ヘーゲル的ではない思想圏に重点を移している面もあるという指摘は興味深い観点である。

本書は、戦前から戦中にかけての「前期バタイユ学」だけでなく、戦後の「後期バタイユ学」を考えるうえでも参考になる。戦後のバタイユは、内的体験という思考の《供犠》の実践の痕跡をラスコーの洞窟壁画から辿りながら《至高性》という新たな《人類》のヴィジョンをエロティシズムというテーマに沿って展開しようと目論んでいたと思われるが、いずれにせよ、前期後期を問わずバタイユの迷宮は《謎》に満ちており、この謎を生きるにせよ、解くにせよ、本書がアリアドネの糸となることは間違いない。